

うことになる。めでたい限りだ。」

五三・怖がるな

参照 ルカ 12 27

「²⁶そういうわけだからな、あの連中などにビクビクするな。

今は蓋ふたをされているものも、やがてはその蓋を開けていただける。今はわからないでいることも、その内はつきりわかるようにしていただけるのだ。

²⁷ 暗闇の中で俺がお前たちに言うことを、明るい所で言い立てろ。こつそり耳打ちされたことを屋根の上から叫び立てろ。

²⁸ 体を殺しても魂までは殺せない者どもなどをただ怖こわがっているのはやめておけ。それよりも、魂でも体でもヒンノム谷にある焼き場の火で滅ぼすことができるお方かたを恐れ畏かしこんでいろ。

²⁹ 雀すずめが二羽一組で一文銭で売られているではないか。だが、その内の一羽でさえ、天の父ととさまのお

許しがなければ、「空から」落ちることはないのだ。
³⁰ お前たちのことなら何だって、頭の髪の毛の数までも、神さまはすっかり御存知でないさる。

³¹ だから、そんなふうにびくついているのはやめろ。モチャモチャと群れているあの雀どもよりお前たちははるかに勝まさつたものなんだ。」

五四・イエシューさまの仲間

参照 ルカ 12 8-9

「³² 人前で自分のことをこの俺の仲間だと言う者のことなら誰であれ、俺はきつと天の父さまの御前でその人のことを、わたくしの仲間ですと申し上げよう。

³³ だが、人前でこの俺のことをそんなやつなど知るものかなどと言う者については、俺は天の父さまの御前で、然さ様ような御仁ごじんは存じ上げませんと申し上げよう。」

誰を恐れるべきなのか？

(マタイ福音書一〇章二六―三一節)

だから、人々を恐れてはならない。なぜなら、隠されているものであらわれないものはなく、秘められているもので、暴露されないものはない。私が闇のなかであなた方に言うことを、あなた方は昼の光あふれるところで言いなさい。私が秘かに耳打ちすることを、あなた方は屋根の上から説き明かしなさい。あなた方の体を殺せても、霊魂を害することができないものを恐れることはない。むしろ、体と霊魂とを地獄で亡ぼすことになるかも知れないことを恐れなさい。

最初にトマス・ペーニアが話した。――僕たちは悪を恐れなくちゃあなりません。なぜって、悪というのは神のようにひとつの霊なんでしょうからな。この霊は一度は神さまのお傍そばにいて、何から何まで神さまに学びました。だけど、此奴は根性が悪かったで、僕らにも悪いことをいたします。トマスの息子フェリペが言った。――悪というのは人間を服従させる霊で、この邪悪な霊は、こいつに従う人間を通して、活躍するんだ。僕たちは愛の霊ではなく、悪の霊に従って行動する人間を恐れなければならない。

オスカー 僕は、イエスはここで人間の虚偽を挙げつらっていると思うんだ。僕たちは時々、こっそりと何かをして、多分、こう考えると思うんだ。「僕は内緒でこれこれの得をする。これについては誰も知ることはないだろう」って。だがここでイエスは、明からさまにならないような秘密は何もない、と言っておられる。

ラウレアノ 僕は次のように考える。つまり、僕たちは悪い霊を恐れなければならない。……しかし、僕が思うに、僕たちは何物も誰をも恐れてはならず、僕たちができる所では、あらゆる所で、不正に抗して闘わなければならない。ここでは、僕たちはそれを屋根の上から叫ぶべきだということが言われているんだ。これはとくに不正に抗する闘いのことが言われているんだと、僕は思う。

アレフアンドロ 少なくとも、「人間を恐れてはならない」という一節の意味は、ここでは完全に明らかかなものだね。こういう人間たちが自分たちに何かをするかも知れない、という不安や、そしていつ、何をするだろうかという不安のことが指摘されているんだ。ある体制に反対するということは、ある不正に反対すること……イエスはここでまったくきっぱりと、たとえ僕たちの命が賭けられていようと、真実を言うことに恐れを抱くことを禁じておられる。正義のためには、僕たちはすべてを賭けなければならぬんだ。あいつらは僕たちの体を殺すことはできるだろうが、そのために僕たちが闘っている事実を殺すことができない。

青年たちの他のひとり。——アレフアンドロ、僕は君の言うことに賛成だ。ここニカラグアの政府は、僕たち民衆を欲するままにしているし、僕たちは恐怖のために口を閉ざして、不正に対して闘お

うとしていない。この箇所が僕たちに言われていることは、恐れてはならない、すべての不正に抗して戦え、ということなんだ。その結果、僕たちが死んだとしても、一体、どうだと言うんだろう？ 彼らは僕たちから体を奪うことはできても、魂まで奪うことはできない。ここで僕たちに言われていることは、戦え、戦ってただ簡単に降服するな、ということだと僕は思う。

アルマンド　僕はここで、もっと重要なことに気がついたんだが。人間のなかには体だけを失う者もいるが、しかし、一方には、体も心も同時に失ってしまう人間がいるということなんだ。搾取者の側に立っている者は、体を失えば魂も両方失ってしまう人間たちなんだ。

私は言った。——私はこの最後の文章から明らかにするのは、イエスが、不滅の魂が救われさえするならば、体を失うことなど重要なことではないという意味で、肉体と魂とを対立させたわけではない、ということだと思っているんだが。イエスにとっては、肉体と魂の救済、あるいは亡びは同時に生じることで、ということは、全人類のことを意味していたんだ。つまりイエスは、今日、私たちが意味しているような意味で、直接《魂》という言葉を用いていたわけではないんだよ。なぜなら、この概念はユダヤ人たちに全然、知られていなかったものだからね。この言葉でイエスがおっしゃるうとなされたことは、人間を滅ぼすことができない死、それゆえに恐れてはいけないう死があるということなんだ。これに対して、完全に人間を抹殺してしまう別の死が存在するということなんだね。

アレファンドロ　つまり、聖書が僕たちに、人間を恐れるなと命じていることは明らかなんだ。僕たちは自由に語り、不正に対しても自由に闘うべきなんだ。いずれにせよ、僕たちにとって明らかで

ないことは、秘密を持ったことなんだ。それじゃあ、福音書には謎がないだろうか？

オリヴィア そうではないと私は思うわ。なぜって、福音書の言葉はすぐに理解されるというものではないし、秘密と言えば秘密なんですからね。それは、すべての人間に理解されるというわけにはいかないんだわ。つまり、この秘密を理解する人は、ほんの僅かな人なんです。それは知性に関与することではなくて、私たちがイエスの謎にみちた言葉に耳を傾ける、私たちの心の深い部分で行われることでしょ？ だけど、私たちは、イエスさまが、いわば個人的に明らかにされたこれらすべてのことを、次代へ手渡して行かなければなりません。そうすれば、それはだんだん大きな集まりに影響を与え、最後には政治にさえ影響して、社会全体を変革するようになる。

フュリオ・マイレーナが言った。——それは、エルネストが自分は社会主義者だと、公的に明らかに宣言したころのようなものだね。つまり、秘密は秘密のままでいられないし、むしろそれは、広く伝えられなければならない性質のものなんだ。

私は言った。——イエスは、ただ自分の使命をほんの僅かばかりしか告知することができなかった。そしてそのことは当時の歴史的な状況が、イエスの働きが何か政治に影響を与えるほどのことを許さなかったんだ。だから、つい最近まで、福音書はただ個人的な領域、あるいは修道院とか、似たような施設でしか実践されて来なかった。しかし、私たちは今、このことを公的にしなければならぬ時が来ているのを理解している。つまり、政治的、社会的な領域においてということなんだがね。今日では、福音書の説く回心は社会全体を包括するものだ、ということが、歴史的な条件になっているん

だね。

アルマンド　そして、不正も搾取も、もはや秘密のままでいられない、ということですね。昔、貧しい人々は馬鹿馬鹿しいような代価で売り渡された。貧乏人たちは、自分たちの運命が神のご意志だと信じ、自分たちはこの人生で貧乏籤を引いたのだと信じていた。今では圧迫されている人たちは徐々に、彼らが搾取されていることに気づいて来た。多分、イエスのこの言葉は、いつか暴露されて事実が明らかにならない程、隠蔽され得るものは何も無いということに関連しているんだろう。そして革命も、すべての家の屋根から広く宣言されなければならぬ。

アンテノール　イエスは宣伝家ではなかった。彼には現代のマス・メディアのようなものは、何も役立てることはできなかった。イエスは一冊の本さえ書かなかった。だからイエスは、彼が弟子たちに耳打ちすることを、と言ったんだろう。だが、今日では僕たちは何も恐れることなく、イエスの言葉を広めるべきなんだ。

二羽の雀は一アサリオンで売られているではないか？　しかもその雀さえ、あなた方の父が望まなければならない、一羽として地に落ちることではない。あなた方は頭の髪の毛さえもみな数えられている。

ラウレアノ　この言葉でイエスは、同じように僕たちに、恐れるな、と言われたんだと僕は思う。神が雀にまで心を配って、落ちないようになさっていらっしゃるんだから、僕たちのことは間違いない。

く配慮して下さる。神が望まれた時にのみ、僕たちが倒れるんだ。ということは、僕たちが倒れることが、何かの役に立つ時ということなんだ。——そしてそれは、基本的には決して倒れるということではないんだ。

マヌエル イエスは、民衆という存在が神にとって、どれ程大きな意味を持っているかということ
を明かしたかったんだ。民衆は神によって、頭の髪さえも数えられている存在だということだ。だから僕たちは、神の前における僕たちの価値を意識しなければならぬ。

他の男が付け加えた。——イエスは、僕たちひとりひとりが神にとって、途方もなく重要なもの
と言おうとなさったんだ。

オリヴィア 私も、福音書はここで、マヌエル坊やが言ったように、私たちがどれ程価値のある
ものかを、説き明かそうとしたのだと思うわ。なぜなら人間は神さまにとって、その創造物のなかで
最も素晴らしい最愛の生きものなんですから。神さまは、私たちが死んだとしても、死んだままでは
なく、さらに天国で生きていけるようになさった程、私たちを愛し、私たちのために心を砕いていら
っしゃるんだから。だから、私たちは何物をも恐れてはいけません。

私は言った。——神のご意志より他のことは、私たちの身に起こったことがなく、また、起こり得
ないのだから、私たちは不安を抱いてはいけません。しかし、これは根本的には、次のことと同じなん
だね。つまり、この全宇宙を神が統べておられるのだから、本当に悪いことというものは生じ得ない。
鳥が飛ぶことにさえ、神は何かをして下さる。つまり、神の愛が全宇宙を統べているということなん

だね。

アルマンド たとえ小鳥一羽の値が、市場ではとても僅かなものであったとしても、その鳥は神にとっては非常な価値がある。ましてや人間は、搾取者たちが非常に低い価をつけ、安く買うことができるものであっても、神にとっては遙かに大きな価値を持っているということなんだ。

——この鳥のたとえは、とても素敵だわ、と娘たちのひとりが言った。

一九七七年十一月の声明から

——ある宣言

十二年前に、わたしはふたりの友人とソレンチナーメへやってきた。そこに小さな観想的教区を設立するためだった。ここで観想と言われているのは、つまり、神との一致である。結局、この神との一致とは、農民たちと共にあることであると、わたしたちに明らかになるのに、そう時間はかからなかった。——農民たちとは、貧しく打ち捨てられて、この群島の岸辺に散在している人々のことである。まもなくわたしたちの教区は、また政治的な内容をも持つに至った。これがわたしたちを革命に導いたのである。そしてまたそれは、そうならなければならない性質のものであった。そうでなかったとしたら、それは過ちを犯したことになるであらう。

わたしたちにこの教区設立を示唆し、霊的にも指導して下さった、かつてのわたしの指導司祭だったトーマス・マートン師は昔、ラテン・アメリカにおける精神的な省察と観想とは、政治的な闘争から遠く離れていることはできない、と言っておられた。最初、わたしたちは無血革命を選んだ。しかし、後にわたしたちに明らかになってきたことは、今日のニカラグアにおいては、武力によらない闘争は不可能だということであった。事実、実際に行動しているいかなる革命家も、武力行使よりは無

血革命の方法を優先していたのである。しかし、彼はつねに自由を選び取ることはできなかった。

政治的にわたしたちを最もラディカルにしたのは、福音書だった。日曜日のたびに、わたしたちは語り合った。農民たちは、驚嘆すべき単純さと福音の中核へのまさに神学的な感情移入によって、神の国の告知を理解し始めた。つまり、この地上における正義の社会の建設である。

しかし、とりわけ、福音書はわたしたち全員に、神の御言葉はたったひとりの人間によって、耳を傾けられるべきではなく、事実はその反対であることを教えたのである。この福音書の精神を汲み尽したソレンチナーメの農民たちは、この国の他の地方の兄弟たち、——つまり、迫害や、恫喝に苦しまなければならなかった農民たちと団結せざるを得なかった。当時、彼らには、投獄され、拷問を受け、殺害され、妻たちを強姦され、自分たちの住居である小屋を追われ、ヘリコプターに追い散らされるという日々が続いていたのである。

その後、ソレンチナーメ出身のある青年男女のグループが——その幾人かはわたしの教区の出身だったが——深い確信から、また十分に考えぬかれたその思想から、武器を取る決心をしたのである。彼らの意見は一致していたし、ただただ、神の国への渴望から、義の社会への希求から、この地上の神の国への願いから、そのように決定したのである。

一体、わたしたちは、ニカラグア闘争に至るようなことを望んでいただろうか。だが、ニカラグア闘争は、この書物にも書かれているように、自分たちを守ろうとする圧迫された民衆によるだけのものではなかった。

今、わたしたちの教区があるこの「山」は、以前、わたしたちが初めてやってきた時のように、相変わらずそこにある。そこにあるものは、ただ野性の美なのである。わたしはここで、幸福な生活を送った。——このほとんど楽園のようなソレンチナーメで。しかし、わたしはつねに、福音への忠誠のために、これらすべてを犠牲に捧げて失ってもよいという心の準備をしていた。そして実際、わたしたちはその生活を犠牲に供した。他の人々が、もっと違った社会を創設するために自分たちの生命を捧げ、苦しみを受けたように。

エルネスト・カルデナル

一九七七年十一月、エルネスト・カルデナルがこのような宣言を出したとき、彼はすでにコスタリカに亡命していた。ソレンチナーメ群島の近くにある、サン・カルロスの「国家警備隊」の駐屯地が襲撃されたことが、独裁者ソモサの体制にとって、ソレンチナーメの共同体を除去しようという契機となった。ソモサはすでにその数カ月前から、「ソレンチナーメの非開化主義者たちを壊滅することになるだろう」と宣言していた。

軍隊はこの共同体のすべての家、すべての設備を破壊し、農民や漁民を追放し、逮捕し、殺害した。農民たちとその子供たちが制作した絵画や陶器、彫刻に限らず、その図書館まで押収された。

何年間にもわたるカルデナルとその友人たちにつけられた秘密警察の尾行は、「共同体の地下作業」

に對する証拠探索のためであった。世界各地からの郵便物が没収され、統制された。金品などは横領され、教区の財産は盗まれた。一九七七年十一月に、エルネスト・カルデナルに對して、逮捕命令が出された。神父であり、同時に詩人であるカルデナルは、ニカラグア解放運動の「サンディニスタ国民解放戦線」の味方であることを、公然と表明していたのである。トーマス・マートンが命名した、この《愛の詩人》は、神父として、詩人として、解放をめざしての民衆の闘いに与することは彼の義務であると宣言していたのである。

ユーгент・ディーンスト書店